

太宰府の文化財

261

推定朱雀大路

奈良・通古賀
奈良く平安時代



▶ 榎社の東隣で見つかった朱雀大路東側溝跡

大宰府は、都そのものではないかもしれませんが、奈良時代には都を意識した街づくりが行われました。その中枢の政庁は、天皇の住まう「宮城」と同様、条坊の北の中央に置かれ、幅広い南北大路が政庁の南前面の御笠川付近から条坊の南端（筑紫野市六反付近）まで伸びていました。この南北大路の名称はわかりませんが、都の朱雀大路になぞらえて「推定朱雀大路」と呼んでいます。発掘調査により、奈良時代く平安時代前期頃の大路の幅は約36m（120尺）で、東西には側溝が設けられていたことがわかりました。側溝のさらに外側にも幅5m程度の空間があり、ここには側道または築地塀があつたと考えられます。

この大路の幅を、同じ頃の道路と比べてみると、当時の都の平城京朱雀大路の約半分、東北の多賀城の中央南北大路の2倍もあるもので、当時としては国内第2位の広さを誇っていました。今の国道3号線の朱雀大路交差点付近と変わらない道路幅は、隊列を組む際に必要なもので、儀礼などの空間利用を想定していたと考えられています。さて、古代の迎賓館「筑紫館（鴻臚館）」と大宰府政庁は、官道とこの「朱雀大路」とで結ばれていました。大宰府政庁へは、「筑紫館（鴻臚館）」と水城西門（吉松所在）を一直線に結ぶ官道をまっすぐ進みます。水城西門を過ぎ、左に大宰府条坊を見ながらそのまま直進し、杉塚あるいは二日市温泉付近で左に折れ、条坊南端から「朱雀大路」に入ります。大路に入り北をのぞむと、両側に大宰府条坊の街並みが広がります。右には般若寺や観世音寺の塔が見えたことでしょう。そして大路の奥には、大野城を配する大城山（四王寺山）と、その山麓に広がる巨大な大



◀ 二日市温泉上空から大宰府政庁を望む

宰府政庁建物群を遠望できたでしょう・・・もし外国の使節が大宰府政庁を訪れたなら、このような風景を見たのではないでしょうか。こうした道路整備や景観整備は、唐を中心とした東アジア国際情勢の中、律令整備とともに必要なものでした。このように「朱雀大路」の規模からも、当時の大宰府の重要性がうかがえます。文化財課 井上信正

太宰府の文化財

262

大行事塔

太宰府市のいたるところに、普段、目にしていても、改めて見るとよくわからない不思議なものが数多く存在していることを皆様、気づいておられるでしょうか。今回紹介する「大行事」石塔もその一つです。写真の大行事塔は通古賀地区の東蓮寺薬師山にあるものですが、一見した限りではまず意味がわからないものだと思います。この大行事塔は高さ258cmあり、台となつている板石も高さ49cmあるので近づいてみると、見上げるほど大きいものです。塔に向かつて左側に安政七年庚申三月廿日と彫られていますので、江戸時代も終わりに近づいた1860年に作られたものであることがわかります。

実はこの大行事塔はここだけではなく、太宰府市に10基ほど存在していることを確認しております。内訳としては国分1、高雄2、三条1、通古賀1、観世音寺1、下高雄1、北谷1、松川1、内山1と佐野地区をのぞいて市内にまんべんなく分布しています。作られた時期はその塔に彫られた年号から文化元年(1804)〜大正4年(1915)つまり、江戸時代後期から大正時代であることがわかっています。



そもそも石塔に彫られている「大行事」とは何のことでしょうか。これは、山王二十社の中七社の一つ大行事社のことです。山王二十一社は、

山末、氣比、岩滝、剣宮、大宮滝殿、二宮滝殿で構成されています。この山王二十一社とは日吉社を守護する神々をまつるお社です。その由来としては、滋賀県大津市坂本にあつた日吉社は、元々は比叡(日枝)山への信仰からはじまつており、比叡山に延暦寺が開かれて以後は、天台宗の発展とともに神仏集合の流れに乗り日吉大社として発展していきました。その中で山王二十一社と呼ばれる比叡山を守護する神々の体系が完成されていきました。この太宰府に

上七社(大宮、二宮、聖真子、八王子、客人、十禅師、三宮)、中七社(牛御子、大行事、新行事、早尾、下八王子、王子宮、聖女)、下七社(小禅師、

なぜこのような大行事塔が建立されたか、そのはつきりとした背景はいまだにわかっていませんが、英彦山にある彦山大行事社との関係や、宝満

山にあつた有智山寺も英彦山と同じく天台宗系の修験者が修行していたことからその関係性を伺えます。また、高雄にある大行事塔では太宰府天満宮神幸祭の事始めの祭りをすることからも天満宮とも関係があるようですが、肝心のその背景はなかなか見えてきません。

現在、確実にわかっていることは、地元の伝承などから大行事塔は秋祭りに関係しており、牛馬の安全の神様として農家の信仰を受けていたこととです。秋には村々からその地域の行事塔へ牛馬を連れていき参拝をしていたことがわかっています。

風景にとけ込んで一見見過ごしがちな石塔も、こうして調べてみるとその歴史の奥深さ・不思議さを秘めています。皆様もご近所の散歩がてらちよつと気をつけて不思議なものを見つけてみませんか。

文化財課 高橋 学

太宰府の文化財

263

ドロクサンヤネのセンダン

通古賀1丁目

通古賀近隣公園内の西側にボツンとセンダンの木が立っています。これは「ドロクサンヤネのセンダン」と言われている木で、5〜6月には薄紫色の花が咲き、秋には黄褐色の実をつけます。木の高さは8m、幹周1.9mを測り、樹齢は200年近くあるかも知れません。

ドロクサンヤネとは、御笠川にあった堤防のことで、御笠川が以前かなり蛇行していた頃、大雨のときはすぐに氾濫し、田畑に被害が出ていました。その後比較的直線に改修されましたが、それでも前井手という堰の下流の堤防は豪雨の時に時々決壊していました。そこで、陶山道益が堤

防に根張りがよく頑強な竹を植えました。その後この堤防は決壊することがなくなりました。当時の村人は陶山道益を称え「道益さんヤネ」と言いましたが、いつしか転訛して「ドロクサンヤネ」と言うようになりました。ちなみに「ヤネ」とは「ヤブ」の方言です。

陶山道益とは、寛永元（1749）年現在の福岡市鳥飼で生まれ、8歳の時父と共に祖父の出生地である現在の通古賀5丁目に移居しました。若い時に福岡の医者について医学を学び、後に通古賀で医業を開業しました。また、勤皇の思想を持ち高山彦九郎とも親交がありました。船賀法

印は「玉城神社縁起」を編纂するにあたり、道益が口伝を書き留めたものを参考にしながら完成したといわれています。

天保8（1837）年は不作の年で生活に困った百姓のために、救援米や義援金を寄付するなど多方面にわたって人々の救済に努めました。翌年の天保9（1838）年10月9日に91歳で生涯を閉じました。また、道益の長男である陶山一貫は、幕末に三條実美などと交流があった勤皇の人です。

陶山道益が治水をした御笠川の堤防は、現在河川改修によってなくなりましたが、ドロクサンヤネに生えていた樹木のうち、このセンダンとそれに寄り添うアラカシの木だけが、平成5年完成の公園にほぼ当時の位置で残されました。この樹木は先人の偉業を物語る生き証人と言えます。

文化財課 宮崎 亮一



太宰府の文化財

264

北谷とお茶の木

文化財課では昨年から宝満山のある北谷区と内山区の山林を中心とした場所で、遺跡の分布調査をしています。宝満山は大宰府政庁が整備された奈良時代以来、信仰の山としての長い歴史があり、そういった意味では地域資源としてまだまだ知られていない遺産が数多く残されている場所の一つです。山中には有名な「有智山城」の濠と土塁のほか、近年では中世の庭園跡を含む「内山辛野遺跡」（市指定史跡）などが知られ、山中に九州を代表する大規模な寺院や山城があったことが知られています。この場所は昔から「九重原」と呼ばれており、おもにお寺のあった平安時代の終わりから鎌倉時代にかけて造られた、坊と呼ばれる僧侶の住居やお堂を建てるため

に造成された段々の地形がはつきり残されており、それがこの地名の由来と考えられます。

文化財の調査でこの有智山城周辺をくまなく歩いてみると、杉の木立の下に繁ったネズミモチやアオキにかくれながら、背の低い「お茶の木」がひっそりと生えていることが気づきます。茶は元来は栽培植物なので自然にここにあったものとは考えられません。江戸時代の初め頃に書かれた「竈門山日記」という仏教や修験道から見た宝満山の歴史をつづった書物には、福岡藩の創設者である黒田長政がこの頃宝満山にいた宝満二十五坊と呼ばれた修験道を生業にする人々が戦国の戦乱で困窮していたため、同じ修験者がいた豊前の求菩提山に習い茶園を経営させるため茶の実を数十石贈った、と書かれています。当時、修験者たちは宝満の山頂周辺に坊を構えていました。ところが、5軒の坊が山裾の茶園に居を構えたようです。その場所は「谷山九重原上辺」とあり、まさに内山辛野遺跡から有智山城周辺もその場所であり、現在生き残っているお茶の木はその子孫たちかも知れません。記録には茶園の経営は利が出ずに終

わったとも書かれています。しかし、明治時代の初め頃に書かれた『福岡県地理全誌』には北谷の物産として「茶」の記載があり、栽培は修験者をはなれ里人によって続けられたようです。北谷の集落の路傍にお茶の木が見られるのもその名残と思われる。博多聖福寺の名僧仙厓さんと宝満山の山芋の民話は有名ですが、お茶も北谷を代表する産物だったようです。文化財

の調査を通して、かつて北谷区が太宰府の「お茶どころ」だったことが見えてきました。文化財課 山村 信榮

▲有智山城周辺に見られるお茶の木



▲有智山城周辺に見られるお茶の木



▲有智山城正面の石垣（中央は宝満山頂への登山道）

の調査を通して、かつて北谷区が太宰府の「お茶どころ」だったことが見えてきました。文化財課 山村 信榮

の調査を通して、かつて北谷区が太宰府の「お茶どころ」だったことが見えてきました。文化財課 山村 信榮



の調査を通して、かつて北谷区が太宰府の「お茶どころ」だったことが見えてきました。文化財課 山村 信榮

太宰府の文化財

265

観世音寺宝蔵

観世音寺の東側、国宝の梵鐘がさがる鐘楼の裏に宝蔵があります。その中には平安時代に造立された仏像をはじめ多くの国指定重要文化財が収蔵されています。宝蔵はこれら諸仏等を保存するために昭和34年に完成した建物で、もう数年で築50年を迎えます。今回は中に安置されている仏様の話ではなくこの宝蔵について紹介します。

建築の際の名称は「観世音寺重要文化財収蔵庫」とされていましたが、仏菩薩の像を収めるのに「収蔵庫」では倉庫を建築するような気分になるため、信仰心からも納得できることを考え「観世音寺宝蔵」とするようになりました。計画では建築面積16坪、基礎を設けその上に鉄筋コンクリート造平屋建、入母屋棧瓦葺き

の本堂（7×5間）とその両側に切妻造りの看視室と宝物庫を付帯するものでした。外装はモルタル吹付け、内部は漆喰塗りで格天井で、防火扉等を設け耐火構造とされています。また、観覧機能を考慮した蛍光灯による照明設備と火災感知装置を設けることとしていました。内部は講堂に似せた造作になっていたようです。

実際に完成した宝蔵は建築面積16坪、鉄筋コンクリート造二階建、寄棟造本瓦葺きで棟の隅には鴟尾が上げられました。一階は高床風になりここに看視室と宝蔵庫が置かれています。外壁もモルタル吹きつけから瓦積み仕上げに変更され全体に落ち着いた雰囲気

井さんによるもので、古代遺跡から出土する「平井」銘をもつ瓦とのつながりを思うと縁を感じます。

このような宝蔵も一朝一夕に建立できたのではなく、そこには多くの物語りがありま

す。戦後の昭和22年から有志により堂宇の修理が開始され同26年に一段落します。その後、講堂の傷みが激しく雨漏り等により仏像にも影響をおよぼすようになりました。再び有志により昭和32年に「筑紫観世音寺文化財保存会」が

結成され宝蔵建設が具体化し、同34年に完成を見たわけです。その間には講堂の屋根が落ちるなどの困難もありましたが保存会の国への補助金要請の活動、また多くの人々による勸進、企業の寄付により事業は遂行されました。

ここには地域に伝わっている宝物（文化遺産）を確実に将来へ伝えていこうという太宰府の人々の固い意志を感じることが出来ます。詳しくは今年の「太宰府市民遺産」展のなかで展示しますのでご覧

ください。

※一あなたの近くの文化財

太宰府市民遺産展詳細は28頁

期日 6月23日～7月29日

場所 太宰府市文化ふれあい館

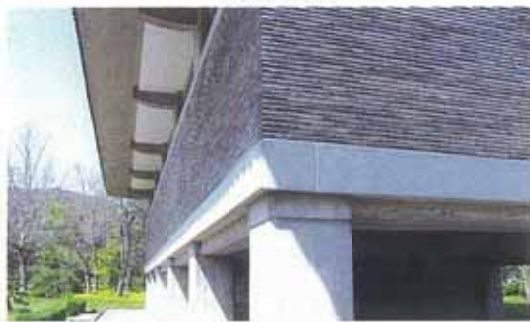
（月曜日休館）

入場料 無料

文化財課 城戸 康利



▲宝蔵鴟尾



▲宝蔵外壁・軒裏



▲宝蔵全景



太宰府の文化財

266

四王寺山

文化遺産がつまった山

太宰府の北側を覆うかのよ
うにそびえる四王寺山、標高

約410mの大城山を筆頭にいく
つかの山々が連なることで、



一つの「お山」を形づくっています。この山は、四王寺山として呼称されており、日本古代の山城として有名な大野城跡や、戦国時代の高橋紹運の城として知られる岩屋城跡があることで、多くの方々に馴染みがあります。では、山の呼称となっている「四王寺」とはどこに由来するのでしょうか。今回はここに焦点をあて、見ていくことにしましょう。

「四王寺」、文字面から見て分かるように、お寺があったことに由来します。時は奈良時代、まだ大野城が大宰府防衛施設としての役割を担っていた頃、当時険悪な関係にあった朝鮮半島の新羅側に我が国に対する「呪詛」の動きがあるという情報もたらされ、この呪詛への対抗策として造られたのが四王寺のはじまりと言われています。今ひとつの目的は、国家仏教の流布があったものと考えられます。奈良時代の「お寺」は、現在の「お

寺」とはやや異なり、当時の大和政権が行った様々な政治戦略の正当性を主張する一つの道具としても利用され、この意図から、国家防衛施設の内側に寺を築き、物心両面からまさに国土防衛を体現しようとしたものと考えられます。

では「四王寺」という呼称へ踏み込んでいきましょう。「四王」は奈良時代の中頃、鎮護国家のために聖武天皇が全国に配した国分寺、この拠り所とした経典の一つ「金光明最勝王経」巻六にある「四天王護国品第十二」に由来しています。四天王（四王）は、帝釈天に仕え、東西南北の四方を守護すると言われています。東方を持国天、西方を広目天、南方を増長天、そして北方を多聞天（別称毘沙門）が守護します。ここ四王寺山にも、やや南方に偏った配置をしていますが、おまかに先の四方を守護する四天王の名を配した場所が残っています。その中の毘沙門堂近くで昭和七年に、平安時

代の「四王」銘平瓦が採集されています。

このような背景をもつ四王寺山ですが、いつから「四王寺」呼称が取られるようになったのでしょうか。実は奈良時代には「大野山」と呼ばれていたことが、万葉集などから読み取ることができます。今探案できる文書資料からは、平安時代の中頃と考えられています。「大野山」から「四王寺山」と山の呼称を変化させた人々の真意を知ることができません。想像ではありますが、国家安泰の願いとしての呼称が残ったのではないのでしょうか。

先月から太宰府市文化ふれあい館にて、「太宰府市民遺産展」を開催しております。今回取り上げた四王寺山を素材とした展示をはじめ、市民の皆様的身近に残る物語をひも解くという作業を通して、太宰府市民遺産を感じていただければと思っております。

文化財課 中島 恒次郎

太宰府の文化財

267

般若寺跡

朱雀2丁目

飛鳥・奈良・平安時代



▲般若寺塔跡 (南西から撮影)



▲般若寺心礎



▲塔原庚寺心礎

西鉄二日市駅の北の丘陵上には「般若寺」という小字があり、寺院の塔跡と礎石(心礎)が残っています。

この寺に関わるとみられる内容が、奈良の法隆寺に秘蔵されてきた下宮聖徳法王帝説(国宝)という聖徳太子の伝記を記した文書の裏書に記されています。

そこには、7世紀中頃に蘇我倉山田石川麻呂以下、蘇我石川麻呂が創建した山田寺(特別史跡、奈良県桜井市)の造営のことが述べられ、それに続き、筑紫大宰帥だった蘇我日向(字は無耶志)が、白雉5年(654)10月、時の孝徳天皇の病氣平癒を願って般若寺を起こしたと記されています。

蘇我日向は、蘇我石川麻呂の弟です。また彼らは、大化元年(645)、中大兄皇子(後の天智天皇)・中臣鎌子(後の藤原鎌足)が滅した、蘇我蝦夷の甥、蘇我入鹿の従兄弟にあたります。

石川麻呂は、この蘇我本家滅亡に際し、中大兄皇子に協力し

たこともあって、このち即位した孝徳天皇の下で右大臣となりました。

ところが、大化5年(649)3月、蘇我日向は、石川麻呂に謀反の疑いがあることを中大兄皇子に伝えます。孝徳天皇は軍を出し、石川麻呂一族は山田寺で自害しましたが、すぐに無実が明らかになりました。皇子は大いに哀み嘆いたそうです。その後、蘇我日向は筑紫大宰帥となり、世の人々は、筑紫に退けられたと噂したと、日本書紀は伝えています。

さて、蘇我日向が起こした般若寺は奈良所在と考えられていましたが、「帝説」裏書内容や奈良般若寺の発掘調査等から、筑前所在説が有力だと考えられるようになり、筑前説については、創建地について諸説あり、大宰府条坊の南の武蔵寺近くで山田寺系の瓦・塔心礎が確認されている塔原庚寺(国指定史跡、筑紫野市塔原)や春日市白水庵寺などが候補に挙がっています。ただ奈良時代には、ここ大宰府条坊内にあったということ、

大方意見の一致をみているようです。

この般若寺丘陵一帯の発掘調査は、九州歴史資料館と太宰府市教育委員会が行っています。

塔跡の調査では、塔心礎の下に11.9m四方の瓦積み化粧基壇が確認されました。出土する瓦は観世音寺出土瓦と共通する老司系瓦が主体で、塔が8〜9世紀頃に存続していたことがわかっています。また最近、寺域が溝や欄によって広く囲われていたこともわかってきました。なお、塔の近くには堂跡とみられる土壇の高まりや礎石群が昭和30年代まで見られたそうですが、その後丘陵全体が大きく削られたため、詳しいことを知ることが難しくなっています。

奈良時代当時、大宰府条坊内に確実に存在した寺院址は、観世音寺と般若寺だけです。「帝説」裏書には、般若寺は「定額寺」として国家から保護を受けたことを伝えています。このこととありであれば、いずれも天皇に関わる寺として条坊内に置かれ、大切にされたのでしょう。

般若寺は未だ謎の多い寺ですが、古代大宰府を物語る一遺跡というだけでなく、創建事情がうかがえ、かつ仏教興隆を担った蘇我一族に関わる寺としても、歴史的意義の高い遺跡といえます。

文化財課 井上 信正



▲出土した軒平瓦



▲出土した軒丸瓦

太宰府の文化財

268

筑前国分寺跡(国指定史跡)

奈良〜鎌倉時代 国分3〜4丁目所在

太宰府市の北西にあたる若千小高く見晴らしが良い高台に、筑前国分寺跡があります。



1200年以上前になる天平13(741)年に、諸国(当時の行政区分)ごとに69箇所を予定、実際は63箇所程度か)に、仏教の経典「金光明最勝王経」を納める鎮護国家を目的とした官寺として建立を命じたものです。

奈良時代に整備された国分寺(正式名称は、金光明四天王護国(之)寺)ですが、その後、時代が下っていくに従って国家からの財政的援助がなくなり、地方豪族との結びつきも弱体化したことにより、廃絶するお寺がでてきます。文献上では鎌倉〜室町時代には30〜40程度確認できますが、天正期(16世紀末)になって、ほとんどの国分寺は焼失し廃絶してしまっています。ただし、建物の一部がわずかに残ったものや江戸時代になって復興したものもあります。

筑前国分寺跡は、発掘調査の成果から8世紀中頃〜後半には成立していたと考えられます。文献上では807年頃

からその名前は登場しており、その後、塔の基壇が壊されたことや、講堂あたりで遺物が出土しなくなる10世紀中ごろ〜11世紀にかけて寺としての機能に深刻な障害が起ころうとしていることがわかります。13世紀になると、聖域たるべき境内に、寺とは関係のない世俗的施設(集落の井戸など)が建てられていきます。本来ならありえないこの現象から、鎌倉時代には官寺としての筑前国分寺は廃絶したと考えられます。その後、江戸時代に入ると、名跡が廃れていることを痛ましく感じた僧侶や民衆によって、復興の努力がなされて江戸時代前期〜中期にかけて復興され、現在は真言宗龍頭山国分寺として法灯を伝えられています。

筑前国分寺跡は、大正11年10月12日に地面の上に露出している遺構や地形を元に国指定史跡地に指定されました。指定面積は、2万1595.55㎡です。その後、九州歴

史資料館と市教育委員会によって継続し行なわれた発掘調査により、地下に残された数多くの国分寺の遺構が判明しています。

今回、新たに指定される地点も平成3年の調査により、掘立柱建物、築地、井戸などが見つかっています。この場所で見つかった築地は、幅2.7m、長さ24.7m、高さは残存している状態から考えると当初は1.5m以上の高さであった可能性が高いです。寺の境内の範囲を示す重要な遺構(築地)がでていることから指定されました。追加面積は996㎡になります。

現在の国分区の名前の由来は、この国分寺から来ていますが、途中、歴史の寸断はありましたが、現在まで脈々とつながっている歴史の流れを感じることが出来る貴重な遺跡として、未来へ伝えていくべき遺跡といえるでしょう。

文化財課 高橋 学

五条の町並み

(戦後～昭和30年代頃)

凡例

- 石祠、石塔、信仰施設
- 旗立石、道標、石碑、燈籠
- 井戸、水車

石塔類は現在ある位置を示したが、移動が判明しているものは当時の位置を示す。

※地図は平成10年のもの



太宰府の文化財

五条のまち

戦後～昭和30年代頃

269

太宰府天満宮駐り場に向かうバスが行き交う五条は、昭和30年代まで草葺きの建物が並び、地図のような諸職の人々が住む家々が軒を連ね、瓦屋からは瓦を焼く煙がのぼり、鍛冶屋からは鉄を叩く音が聞こえていました。また、夏には御笠川沿いの竹藪一帯で、ホタルが乱舞していました。昭和40年代に入り、草葺き

の建物や商家はなくなっていく、現在は鍛冶屋や土塀などが残るだけですが、屋敷の片隅には昔と変わらずに庚申塔や恵比寿神など多くの石塔や石神などが祀られています。五条は、時代と共に変化していますが、四王寺山や宝満山の緑を背景に続く細い道と町並みは趣のある景観を示し、車で訪れた参拝者に天満宮が近いことを感じさせてくれます。

文化財課 宮崎 亮一

太宰府の文化財

(270)

大応国師と横岳崇福寺跡

観世音寺の北の四王寺山裾、観世音寺6丁目である通称「観世団地」内の一角に、「法堂跡」、「毘盧庵跡」と呼ばれる旧跡があります。ここは昭和42(1967)年にこの観世団地が造成される前に発掘調査で見えられた、鎌倉時代創建の禅宗寺院である横岳崇福寺の中心的な建物があった場所です。「法堂」は寺の住持(僧侶の長)が弟子に説法をおこなう建物で、禅宗にとつては重要な建物でした。調査では礎石を用いた瓦葺の立派な室町時代の建物が発見され、さらにその下の層にも鎌倉時代のものと考えられる礎石建物があることがわかりました。調査は市(当時は町)の体制も整っておらず、九州大学の建築学の先生を中心にした急

ごしらの調査団がおこないました。当時の彼らの所見ではこの建物を「仏殿」の可能性があるとされています。また、この建物の西側にも「僧堂」と考えられる建物が見つかっていきます。鎌倉時代にさかのぼる禅宗寺院で発掘調査された中心建物としては、全国的に見ても唯一の貴重な事例となっています。

横岳崇福寺は博多承天寺、京都東福寺を開いた聖一国師(円爾弁円)が、随乗坊湛慧の導きにより仁治2(1241)年に開堂し、後文永9(1227)年、大応国師(南浦紹明)によつて開山されたとされています。大応国師は当時起きた文永・弘安の役(元寇)の渦中で、武藤少武氏を助け、元側の使者の趙良弼と交渉をお



こなうなどの活躍が知られ、33年の異例ともいえる長期間この崇福寺に止まり教えを広めました。彼の師弟たちは「天応派」、「横岳派」などと呼ばれ、現在まで続く臨済宗の流れの源となっています。

寺は戦国末の天正14(1586)年における島津兵による岩屋城攻めにより全山が焼失したとされ、寺は千代町(福岡市博多区)に移され、それ以降は静かな山野に帰してしましました。現在までの発掘調査で寺院の塔頭(離れた住持の居住坊)が白川の谷で見つかり、

そこには昭和50(1975)年に修業道場としての「崇福寺別院」が建設され、その横に安置された大応国師の供養塔(県指定文化財)が管理されています。

今年は大応国師没七百年の年に当たり、寺では遠忌行事がおこなわれるなどして、再度、臨済禅の故郷である横岳崇福寺が注目されつつあるようです。

文化財課 山村信榮
写真提供 崇福寺

